

2023 年度大学コンソーシアムとちぎ「大学を超えた共同研究支援事業」報告書

所 属 機 関 名	作新学院大学女子短期大学部
団体・グループ等名	
研究代表者名 (所属部署)	森嶋 佳織 (作新学院大学女子短期大学部)
電 話 ・ F A X	028-670-3681 (直通) ・ 028-667-7110
E - m a i l	morishimak@sakushin-u.ac.jp
研究連携担当者名及び連絡先	大島潤一 (宇都宮大学農学部附属演習林)
研究連携校名	作新学院大学女子短期大学部 宇都宮大学
関連自治体・経済団体等名	

1. 研究事業名	幼保小の接続を視野に入れた保育動画コンテンツ開発とその学習効果の検討
2. 実施年度	令和5年度、令和6年度
3. 研究成果等	【研究の背景と目的】 幼児教育における領域「環境」のねらいの一つには、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持ち、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする力を養うことが挙げられる（文部科学省 2017, 幼稚園教育要領；厚生労働省 2017, 保育所保育指針）。円滑な幼保小の接続のためには、「遊び」を中心にした自然体験活動が学校教育の何に繋がっていくのかを見据えた領域「環境」の保育指導を行うことが重要である（鮫島 2020, 鹿児島国際大学福祉社会学部論集）。したがって、保育者は、幼保小の接続を視野に入れて子どもたちの自然体験活動を支援することが極めて重要である。 一方、子どもの自然体験は、都市化による自然減少のため、以前よりも得がなくなっていることが問題視されている（無藤 2022, 萌文書林）。さらに、自然物を用いた遊び方について、保育者の知識不足も危惧されている（地下・井上 2023, 大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要；森田ら 2014, 保健福祉学研究）。こういった課題を踏まえて、保育者養成校において子どもの自然体験を支援できる保育者を養成することが必要であり（井上 2008, こども環境学研究；前迫 2006, 奈良佐保短期大学研究紀要）、そのために必要な専門的知識や保育技術を習得できる学習プログラムの開発が急務と考えられる（藤井・佐野 2023, 日本自然保育学会第8回研究大会 研究・実践発表要旨集）。 動画コンテンツは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う教育機関閉鎖の代替案として進展し、保育動画による子育て支援や学習効果が期待されている（例えば、中村・前田 2022, 常葉大学健康プロデュース学部雑誌；設楽ら 2022, 作新学院大学女子短期大学部研究紀要）。そこで、本研究では、自然物を用いた「遊び」の知識や技能を学ぶことができる「生態系・生物多様性」に関連した保育動画コンテンツを開発したので、報告する。

【研究成果】

(1) 保育動画の作成

本動画の撮影及び実践は、研究活動の一貫として保育者養成校の学生6名とともに実施した。本動画では、ネイチャーゲームを取り入れた。ネイチャーゲームとは、五感を使って自然と親しみ、自然との一体感を感じることで「自然への気付き」や「分かち合い」の精神を育む自然体験活動である（日置・神長 2021, 日本シェアリングネイチャー協会）。本動画は、幼稚園児（3歳から5歳くらいまでの子ども）が視聴することを想定し、①子どもがネイチャーゲームを「やりたい」と感じ、②子どもが野外で遊ぶときの注意点に気づくこと、の2点を重視した。動画の構成は、保育現場で一般的な「導入・展開・まとめ」の実践プロセスに従った（表1）。「導入」では、展開のネイチャーゲームに繋げるために、手遊び「ピクニック」を学生全員で実践した（図1a）。「展開」では、まず、野外で遊ぶときの注意事項を紹介した（図1b, 2）。次に、ネイチャーゲーム「音いくつ」を実践した（表1；図1c～e）。「音いくつ」の活動のねらいは、（1）身近な自然に耳を傾け、様々な音を感じる驚きや楽しさを味わう、（2）身近に様々な生き物がいたり、植物があることを聴覚を通して感じ、親しみを覚える、（3）聞こえてきた音から想像を膨らませたり、思いをはせたりすることである（日置・神長 2021）。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿（文部科学省 2017；厚生労働省 2017）に繋がる効果では、(i) 思考力の芽生え、(ii) 自然との関わり・生命尊重、(iii) 言葉による伝え合い、(iv) 豊かな感性と表現、の4点が挙げられる（日置・神長 2021）。これらの特徴を踏まえて、「音いくつ」は宇都宮大学附属船生演習林（以下、演習林）の自然環境を活かすネイチャーゲームであると考え、選択した。

撮影では、保育の現場を想定して保育者役（2名）と幼稚園児役（3名）に分かれて実践した（図1d, e）。



図1 作成した保育動画の一部。「導入」の手遊び「ピクニック」を実践している様子（a）、「展開」の野外活動時の注意事項を説明している様子（b）、「展開」の「音いくつ」に使用した演習林の自然環境の動画（c）、「展開」の「音いくつ」を保育者役と幼稚園児役に分かれて実践している様子（d）、「音いくつ」で保育者役の学生が自然環境の動画から聴こえた声の鳥を紹介している様子（e）、「まとめ」で使用した野生動物の紹介動画（f）

表1 動画の構成と時間

構成	内容	時間
導入	手遊び「ピクニック」を全員で実践	49秒
展開	野外活動時の注意事項を説明	48秒
	ネイチャーゲーム「音いくつ」を保育者役2名、子ども役3名に分かれて実践	3分58秒
まとめ	動画視聴後に子どもの自然体験活動を動機づける声かけ	14秒
	演習林で撮影した野生動物の紹介	1分35秒
	合計	7分24秒

	幼稚園児役の学生は、演習林において撮影した自然の音の動画を視聴し、動画から聴こえた音を回答した。自然の音では、ヒヨドリ (<i>Hypsipetes amaurotis</i>)、サンコウチョウ (<i>Terpsiphone atrocaudata</i>)、ウグイス (<i>Cettia diphone</i>)、キビタキ (<i>Ficedula naccissina</i>) の鳴き声および川の水が流れる音を使用した。最後の「まとめ」では、動画視聴後に子どもの自然体験活動が主体的に展開されるように動機づける声かけを学生全員で行った。本動画の撮影には、GoPro HERO8 (GoPro社) を用いた。 さらに、演習林において2023年8月28日から2024年1月30日に自動撮影装置 (L TL Acorn、Ltl-6210 Plus 940nm、Cams社) を2台設置して、野生動物の動画撮影を行った。その結果、ニホンジカ (<i>Cervus nippon</i>)、イノシシ (<i>Sus scrofa</i>)、ハクビシン (<i>Paguma lervata</i>)、ノウサギ (<i>Lepus brachyurus</i>)、シジュウカラ (<i>Parus minor</i>)、ヤマドリ (<i>Syrmaticus soemmerringii</i>) が撮影された。本調査で得られた動画を用いて野生動物を紹介し、子どもが「生態系・生物多様性」への関心を持てるような動機づけを行った。 (2) 学会発表 本研究結果は、2024年8月に行われた日本環境教育学会第35回年次大会 (千葉) にて発表を行った。 森嶋佳織・大島潤一「実践報告 栃木県に自然体験活動支援のための保育動画コンテンツの開発」、第35回日本環境教育学会大会、江戸川大学 (千葉県)、2024年8月
4. 今後の課題及び発展性	今後、保育者養成校の学生を対象とした動画視聴後のアンケート調査を行う。アンケート調査は、2024年10月に実施予定である。アンケート調査では動画視聴によって、自然物を用いた「遊び」の知識や技能を学び「生態系・生物多様性」に対する理解が深まったかどうか、自由記述式項目を設け、KH Coderを用いた言及頻度分析を行なう。これらの結果を踏まえて、保育動画コンテンツの学習効果を明らかにする。 本研究で得られた成果を2024年12月発行の作新学院大学女子短期大学部研究紀要にて実践研究として報告する。また、来年2025年3月開催される日本森林学会での学会発表や本研究に取り組んだ学生による第21回学生&企業研究発表会 (大学コンソーシアムとちぎ主催) での発表を予定している。 今後の発展性では、本研究成果に基づき保育者養成校の学生が動画作成及び視聴により得た知識をどのように実践し保育技術を取得するのか、学生の学習効果を総合的に検証する。将来的に、幼保小の接続を視野に入れた環境教育のアウトリーチプログラムの開発を目指す。



図2 野外活動時の注意事項に使用したイラスト. 虫に刺されないような服装の説明 (a)、触ると危ない植物の説明 (b)、熱中症対策の説明 (c)

(注) 1. 記述が枠内に収まらない場合は、枠を拡大してください。

2. 事業内容が分かり易いような資料や写真などがあれば添付してください。

報告書 (添付書類を含む) はA4判3枚以内にまとめてください。

3. この報告書は、大学コンソーシアムとちぎのホームページへ掲載します。